株式会社レスターエレクトロニクス
香港支社　セールスマネージャー

田中亜梨沙さん

夢だった海外生活、いま香港で働いています。

ビクトリア・ハーバーにて。背景は香港島

海外とかかわる仕事ができたら――大学時代から思い描いていた夢だった。その夢をかなえ現在、香港で働く田中亜梨沙さん。現地での仕事と生活、そしてこれまでの歩みを Zoom でお伺いした。

たなか　ありさ

1987 年広島県広島市生まれ。広島女学院高等学校卒。2011 年専修大学経済学部経済学科卒業後、(株) レスターエレクトロニクス（当時、(株) UKC エレクトロニクス）に入社。2019 年 10 月より香港支店に配属。趣味はハイキングやマリンスポーツ。

香港での生活を楽しむ

香港の中心地、九龍サイドにオフィスはある。半導体などの電子部品をメーカーに卸す商社だ。日本の本社と日々連絡をとりながら、現地の営業・営業アシスタントチーム計 18 名を田中亜梨沙さんは取りまとめる。

「大きな問題が起きる前に防げるよう、アンテナを張っています。収支の管理など重要な仕事を任せてもらえて、やりがいを感じます」

香港に赴任したのは 2019 年 10 月。民主化デモが熱を帯び、いたるところにバリケードが築かれた街には、催涙ガスの臭いが漂っていた。

あれからおよそ 2 年。その後、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、出入国の制限といった不便は今も続くが、ここでの暮らしにもすっかり慣れた。

「香港はすごく住みやすくて、生活は楽しい」と実感する。仕事での会話は主に英語と日本語。コミュニケーションに不自由はない。

オフの過ごし方に関しては、「こちらに来てからすっかりアウトドア派になった」という。香港は市街地から海も山も近く、ハイキングやビーチキャンプ、サーフィンやカヤックなどを大いに楽しんでいるそうだ。

海外旅行とバイトとゼミ

子供の頃から、両親によく海外旅行に連れて行ってもらった。大学生になってからは毎年、夏期休暇にはバックパッカーとして主にヨーロッパを旅した。現地でボランティアに参加するなどしながら積

↑香港の獅子山（Lion Rock）でのナイトハイク

↑香港の西貢でビーチキャンプ

↑香港にて、先輩が帰任する際の壮行会（前列右端）

↑学生時代のイタリア旅行で出会った仲間と（右から２人目）

極的に異文化と触れた。

「海外の人と交流し、考え方、価値観の違いに気づくのが面白いと感じています。日本にはない食や文化、景色に刺激を受けて、帰ってくると、またすぐに行きたいと思います」

旅費を貯めるため、アルバイトにも精を出した。当時、新宿にオープンしたばかりのアメリカで人気のドーナッツショップの日本一号店。採用面接は「あなたの性格をこの画用紙に表現して」「テーマに沿って寸劇をしてください」など、まるでタレントのオーディションのようだった。そのせいか、個性あふれるメンバーが揃っていて、楽しかった。サークルのような居場所でもあった。

そして、もう一つ学生時代に力を入れたのが望月宏ゼミでの勉強だ。厳しい指導だったが、そこで磨かれた論理的な思考は社会でも役立ったという。

「お客さんに商品を売り込むとき、どう説明すれば納得してもらえるか、ゴールまでの道筋を自然と考えられるようになったのは、ゼミのお陰です」

人との繋がりを仕事に活かす

憧れは「バリバリ働くキャリアウーマン」。できれば海外と関係をもつ仕事をしたいと思っていた。

大学卒業後、「バリバリ働く」という点では、すぐにその通りになった。国内の電機メーカーを担当する営業職。時に弱音を吐きたくなることもあったが、がむしゃらに働いた。そして３年ほどして、仕事も覚え、少し余裕もできた頃、新たな気づきがあった。

「海外と関わりたいということを海外駐在員の大先輩に相談したら、国内にいても海外とつながるビジネスはできるよということを言われて、確かにそうだなって思ったんです」

それから、仕事への向き合い方は変わった。輸入商材を評価してもらい、技術力、品質の良さを実感してもらったり、顧客の出張ついでに現地サプライヤーで打ち合わせをし、実際に技術力を実感してもらえるようにアレンジしたりと、与えられた仕事だけでなく、海外と繋がりを持ちながら、自らのアイデアを提案していった。

2018 年、ラスベガスで開催されたコンシューマ・エレクトロニクス・ショーでは、中国製半導体を搭載した国内顧客メーカーの製品技術発表にも携わった。

「国を超えてサプライヤーとメーカーの橋渡しができたことに大きな手ごたえを感じました」

そして、チャンスが巡ってくる。社の方針が変わり、経験を積ませるために、若手も積極的に海外に派遣することになった。田中さんに白羽の矢が立つ。

これまであらゆる場面で人との繋がりに助けられてきたと感じている。人との繋がりは、今も仕事をするうえでの拠り所だという。

「たくさんの人との繋がりがあれば、わからないこともすぐに聞けて、協力し合えます。現地スタッフが困っていることも、私がつなぎ役となって解決していけたら。香港支社と日本の本社との橋渡し、それが私の役目だと思っています」